



先進校に学ぶ
キャリア教育
の実践
CASE 2

大阪・府立
布施北高校

一年間を通じて企業等で実習を行う

普通科高校のデュアルシステム専門コース

取材文／永井ミカ 撮影／高橋貴絵

Outline
キャリア教育の全体像

研究指定校として出発した
日本版デュアルシステム

大阪府立布施北高校は、2004年から3年間、文部科学省より「日本版デュアルシステム」の研究指定を受け、25校中唯一の普通科として注目を浴びた。06年入学生からは大阪府教育委員会より「デュアルシステム専門コース」の設置も認められ、取り組みを継続している(図1)。

デュアルシステムとは、本来、ドイツにおける産・官・学一体の職業訓練制度。中学校卒業以上

の若者が、週3日は企業で職業訓練を受け、2日は職業学校で普通教育などを受けるシステムだ。日本版デュアルシステムはドイツのそれほど本格的ではないが、やはり学校と企業が連携して行う人材育成システムとして、主に専門高校で取り組みが行われている。

一方、普通科高校である布施北高校は、同システムを職業訓練ではなく「地域と連携した人権教育・キャリア教育」と位置つけた(図2)。2学年、3学年の希望者が対象で、1年を通して、週1回、まる1日、企業・施設等で職場体験をする「デュアル実習」が核となる。実習をさらに効果のあるものにするため、校内での座学(2学年は「デュアル基礎」、3学年は「デュアル演習」)も週1回ずつ実施。さらに3学年では「文書デザイン」

図1 デュアルシステム導入の経緯

年度		選択生徒数 (人)	協力企業・ 施設数(カ所)
2004	文部科学省より「日本版デュアルシステム」の3年間の研究指定を受ける。初年度は主に、受け入れ企業・施設の開拓やカリキュラム編成などの準備を行った。	—	—
2005	デュアルシステム本格実施。	2年 6 3年 11	18
2006	大阪府教育委員会より「デュアルシステム専門コース」設置校の指定を受ける。	2年 14 3年 13	25
2007	選択生徒数が増加したため、2年生にデュアルクラスを編成。	2年 37 3年 20	67

日本版デュアルシステム

専門コース

地域社会との連携

>> School Data

普通科／1978年創立
生徒数／540人(男子248人・女子292人)
進路状況(2007年度実績)／大学 12.2%・
短大 1.5%・専門学校 14.5%・
就職 38.2%・その他 33.6%
大阪府東大阪市荒本西1-2-72(10月14日より)
TEL 06-6787-2666



首席
デュアルシステムプロジェクトチームチーフ
中嶋義博先生

が加わり、生徒たちは東大阪大学に出向き大学教員の支援を受けて「情報」の授業を受講する。これら専門コースの4科目は、自由選択科目、類型選択科目、情報演習、芸術などの時間に代えて行われ、すべて単位認定される(図3)。

また正規の授業以外でも、デュアル生は大学の学園祭や市民イベントなどに参加し、地域と交流している。生徒が外部の人と積極的に関わり、長期的に人間関係を築いていくこと。これらが同校のデュアルシステムの大きな特長である。

Close up ① 立ち上げプロセス

「トライ&チェンジ」で

学校全体を活性化

布施北高校のある東大阪市は全国でも有数の中小企業密集地。高い技術力を持つ工場が多く、工場集積率は全国一を誇る。

そして、布施北高校はいわゆる課題集中校。家庭環境、経済状況などの問題を抱えた生徒が多く、留年や中退も珍しくはない。進路未定者は例年30%程度おり、就職のミスマッチ、離職率の高さなども問題となっている。中小企業が多い地域ゆえに景気悪化の影響をもろに受け、従来なら就職できていたであろう生徒たちも、進路未定で卒業することが多くなっていた。

「こうした状況の中、学力にも自分自身にも自信を持っていない生徒が多い。とくにコミュニケーションが苦手な生徒が目立ちます」と、首席でデュアルシステムプロジェクトチームチーフの中嶋義博先生。「普通科高校としての限界を感じる」と同時に、キャリア教育の必要性も感じていたため、思い切って研究指定に手を挙げたわけだ。学校の特色を新たに打ち出したいという意図もありましたが、何よりも生徒を社会に求められる人材に育て自信をつけさせたい、それによって生徒も教員も元気になる学校全体を活性化させたい、これがいちばんの狙いでした」

同校のデュアルシステムのキャッチフレーズは「トライ&チェンジ」。実社会の現場にトライし、自らを変革し続けるという意味だ。①一般教養や読・書算など基礎学力、②基本的な生活習慣や言葉遣い・マナー、③人との協調性やコミュニケーション能力、④意欲的かつ責任を持って仕事に取り組む職業観・勤労観、などの資質や能力を養うことを目標としている。

Close up ② 職場体験

問題点などありのままを告げて

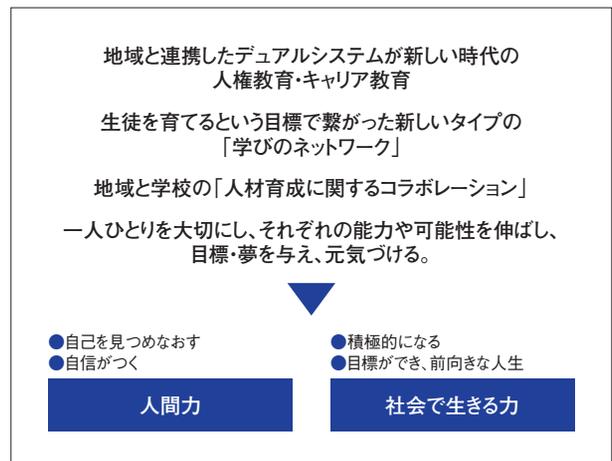
協力企業施設を開拓

デュアル実習においては、幸い同校は協力企業

図3 デュアルシステム専門コースの教育課程

	科目名	内容	単位数
社会での体験	2年 デュアル実習I 3年 デュアル実習II	4分野「製造・現業」「販売・営業」「介護福祉・看護」「幼児教育・保育」において、週1回、まる1日の職場体験を1年間実施。原則として実習先は1カ所につき1人、2学年については前後期で実習先は変える。	各6
学校での授業	2年 デュアル基礎 3年 デュアル演習	社会人としてのマナー／自己表現の方法／実習の振り返り／体験の共有／課題解決と課題設定／実習に対する基礎知識	各2
大学での授業	3年 文書デザイン	ビジネス情報の表現力／情報発信能力	2

図2 デュアルシステム概念





デュアル実習の様子。左は保育実習、右は製造実習。週1回、まる1日を実習先で過ごす。

施設の確保はしやすい立地にあった。製紙工場やカーテン工場、理美容室、幼稚園、デイサービスセンター、デパート、ベンチャー企業などが協力者として名乗りをあげてくれた。

「我が校の問題点や生徒の様子についてありのままをお話しし、『地域の人材を一緒に育てましょう。どんな生徒であつても教育していくという観点で受け入れてください』とお願ひしました」と中嶋先生。始まってみれば、若い社員を育てるカリキュラムづくりができる、職場が活気づくなど、メリットがあると感じている企業・施設も出てきている。また、従来は工業高校にのみだった求人枠を普通科高校にも広げた企業もある。「生徒を地域で育てていこう」という気運は高まっているようだ。

実習をしながら成長できるのが長期型職場体験のメリット

デュアルシステム専門コースを選択できるのは2学年からで、原則として希望者は全員受け入れられている。1学年2学期に説明会を開いてエントリーを募り、保護者への説明、面接、実習先の見学などを経て決定していく。興味があつても自信がなくエントリーできない生徒や、学校は好きだけれども授業(勉強)では結果を出せない生徒などには教員から声をかけることも。さらに迷ったすえに3学期に駆け込む生徒にも門戸を開くな

ど、なるべく多くの生徒が参加できるよう工夫をしている。それでも、課題の内容や実習の大変さを知るにつけ希望者は減り、最終的に残る生徒は最初の説明会参加者のおよそ2分の1。今年度は2学年34人、3学年18人が選択しており、昨年度から2学年は1クラスを専門クラスとして編成している。

実習先は「製造・現業」「販売・営業」「介護福祉・看護」「幼児教育・保育」の4分野。知らない場所にひとりいくことが貴重な体験になるという考えから、原則として1企業・施設につき1人の生徒を選ぶ。また、なるべく多くの体験をさせることも、本人の希望や適性をふまえ、2学年では前期・後期で実習先を変えることが多い(3学年は原則で通年)。

たとえば、前期に介護施設、後期に工場と方向性を変えた生徒は、最初は介護職を希望していた。しかし、体験して初めて、介護というのは高齢者のお世話をするだけでなく、高齢者を楽しませるなどの工夫も必要だと気づき、そのことが重荷になってしまった。そこで、後期は木工製作所で実習。ていねいな仕事ぶりが高く評価され、結局は本人の希望もあり技能系の仕事に就職した。「我々が施設の介護方針を理解していなかった点もありました」と中嶋先生。この生徒が介護施設の実習で遅刻や欠勤をするようになったため、原因をじっくり話し合っていくうちに、本人も気づかなかつた適性に気づけたという。

半年や通年の体験のメリットに、長いスパンで

仕事の流れを見ることができたり、幅広い関わり方をさせてもらえることが挙げられる。一方、細かい指示はなく自分で考えて動かなければならないので学ぶことは多い。基本的にはほかの従業員と同じように仕事を受けたため、営業の現場や、イベント、販売会などに同行したり、生徒のアイデアが商品化された例も。また、実習1回ごとに学校で振り返りをし、自身の成長を実感しながら続けられるのも大きなメリットだ。

ほかと比べることなく一人ひとりを評価する

デュアル実習に関わっている教員は8人。実習時には毎時間手分けして実習先をまわり、生徒の様子を見たり受け入れ先の担当者などと情報交換する。実習先に任せきりにしないという姿勢も、信頼関係構築のために欠かせない。実習にテストはなく、これら教員の評価と出席状況、実習先による評価で成績をつける。実習先には前期・後期に1回ずつ、「態度」「意欲」「スキル」「コミュニケーション力」という観点で評価(図4)してもらうが、ほかの生徒との比較で相対的に評価するのではなく、個々人の成長を評価基準にしてもらうことも、1企業・施設に生徒1人を原則としている理由のひとつである。

教員はさまざまな職場と深いつながりを持ち社会勉強をしながら、生徒とともに一人ひとりの

図4 企業・施設向け実習評価シート

デュアル実習評価シート

企業・施設名 _____ 評価者氏名 _____ 印

研修生氏名 _____ 年 _____

それぞれ、 S 際立って優れている
 A 優れている
 B 普通である
 C 不十分である
 F まったく不十分で改善の意欲も感じられない

の5段階で評価していただきます。

ただし、各実習先・実習内容によって、評価しかねる項目については、未評価でかまいません。

評価単元	評価項目	評価
態 度	時間を守っていたか	
	勤務中に、定められた服装等をきちんと出来たか	
	作業中に私語を慎むことが出来たか	
	「おはようございます」など明るく挨拶が出来たか	
	「ありがとうございました」等感謝の言葉を素直に言えたか	
意 欲	期間を通じて積極的に取り組めたか	
	仕事の内容を進んで知ろうとしていたか	
	新しい作業へのチャレンジ精神があったか	
	仕事をするを楽しんでいたか	
	少しでも能率よくやろうと工夫していたか	
仕事上のスキル	仕事を丁寧・安全に出来たか	
	わからないところを質問できたか	
	指示・連絡事項を十分に理解して作業に向かったか	
	整理・整頓・清掃は十分出来たか	
	仕事に必要な読み・書き・計算の基礎力はあったか	
コミュニケーション力	職場の人やお客様等に対して適切な言葉遣いできたか	
	失敗したときに素直に謝れたか	
	職場での他者(客、園児、高齢者等)との交流に進んで参加していたか	
	自分の意見や気持ちを伝えようとしていたか	
コメント	職場の方との十分なコミュニケーションを取れたか	

適性を探っていく。ミスマッチを事前に防いだ例もある。人と関わるのが苦手でもものづくりの分野への就職を目指していた生徒。実習先に教員からその旨を伝えたところ、社長から「絶対にあいさつをすること、会社で昼食代を出すので必ず社員と一緒に食べる」と条件が出された。そのうち、おとなしかった生徒が社員たちとコミュニケーションをとり始めた。彼は結局、別の道を探するために大学に進学しオープンキャンパスの案内役などをやっているという。こういった個々の事例が積み重なり、デュアル生は一般生徒と比較し進路未定者の割合も少ない(図5)。

さて、実習の集大成として行われる「デュアル実習発表大会」では、生徒がスライド上映や演劇で実習の内容を紹介したり、感想等を発表したりする。「発表会には力を入れており、生徒にも観客にも感動してもらえらる構成を考えています。地域の活性化にもつなげたいですから」という中嶋先生。実習先の担当者を招待して、実習の意味と成果を感じてもらおう。また、人前で話すことが苦手な生徒が、自分が身をもって体験したことを堂々と発表する姿に、教員たちも感動するという。さらに、学校説明会では地元の中

学生に生徒自身がアピール。従来は不本意入学も多かった同校だが、最近では同システムのことを知り目的を持って入学してくる生徒も増えた。

図5 3年生の実習先と進路(2007年度)

実習分野	生徒数	進学	就職	未定
製造・現業	4	専門(芸術)1	営業1、製造1	1
販売・営業	3	—	販売3	—
保育園・幼稚園	10	短大(幼児教育)1、 専門(保育)1	介護1、営業1、販売1、 接客2	3
医療看護	1	—	調理1	—
介護福祉&製造	1	—	現業1	—
合計	19	3	12	4

Close up ③ 高校・大学での授業

実習の振り返りができる
 デュアル基礎・デュアル演習

校内で週に1回2時間続きで行われるデュアル基礎(2学年)とデュアル演習(3学年)。2学年



デュアル実習発表大会の様子。演劇やスピーチなどで発表する。

VOICE

■志望理由・テーマ(2年生)

- 学校やバイト以外で多くの人たちとコミュニケーションをとりたかったから。
- 進路を決めるときに役立つと思ったため。いろいろなことを早い段階で経験したかった。
- 自分が何の仕事に向いているのかわからなかったし、自分が就職したとき、少しでも役に立てばいいなと思ったから。学校では学べないことを学べる気がしたから。

■学んだこと・成長したこと(2年生)

- コミュニケーションを他人ととれるようになった。いやなことから逃げずに頑張れた。
- 目上の人とは敬語で話す。そして休まない。 ●仕事の楽しさ、辛さを学んだ。
- 人見知り少し直った。初対面の人と楽しく話せるようになった。
- 我慢しなければならぬことも多いことを学んだ。
- 子どもたちに接する態度を学んだ。少しは大人の考え方ができるようになった。
- 大人の厳しさを教えられた。理不尽な文句も笑顔で対応しなければならぬ。
- 子どもに対しても大人に対しても、少し落ち着けるようになった。

■「デュアル」で思うこと(2年生)

- 社会に出る前に、自分がその仕事に向いているのか確かめられる。普段より時間を守って最後まで真剣に取り組むのは難しいけど、信用を失わないようにしたいと思って行くようになった。
- デュアルは最初楽そうやなと思って選んだけど、実際行ってみるとすごく大変でした。
- 実習先の人たちとの会話が面白い。実習先の人たちとの会話で敬語が学べる。
- 入学した時から、デュアルをしたくて希望しました。実際やってみたら小さい子の言葉やお年寄りの言葉…言葉ですごく悩みました。だけど、くじけず笑顔でいると、仲良くしてくれる方が多くて、私に力を与えてくれています。

■あなたにとってデュアルとは?(2年生)

- 自信の持てる授業。 ●自分と向き合う機会を与えてくれた。
- 辛いけど一日が早く過ぎるほど楽しい勉強。疲れたと思って来週が楽しみ。
- 自分がどこまでできるか試せるところ。学校では学べないこと、できないことが経験できた。

■デュアルで得た知識・テクニク・技術(2年生)

- 数ミリの誤差でも商品はだめになる。 ●遅刻や欠席のときは、何があっても勤務先に連絡する。
- 笑顔が大事。 ●整理整頓能力。相手のほしいものを聞きだすトーク能力。
- 企業先の方のやっているように、同じようにやると物事がスムーズにできる。
- 子どもやお年寄りと話すときは、目線に合わせて聞くと理解できる

■先輩たちへのメッセージ(3年生)

- できる限り休まず、絶対にサボらず、きちんとまじめに働いて、少しでも実習先の人たちの役に立てるようにがんばってください。
- 面倒くさいし、しんどいことは一杯ある。しかしやってみれば自分の中で、将来に近づけたり、何か意志が固まると思います。その時に初めて「やってよかった」と思えると思えます。一度がんばってみては?

>> 布施北高校に学ぶ実践ノウハウ

- 高校と家庭だけでなく、地域力(企業や施設、大学等の教育力)により生徒を教育。生徒を学校の外へ出すことで成長させる
- 専門コースを設け、一人ひとりに対して細やかに指導
- 通年、または半年の長期サイクルで幅広い体験をさせる
- 体験をしたあとに1回ずつ振り返りをし、問題があれば解決策を検討する
- 講義だけではなく作業を取り入れ“参加できる授業”にする
- 実習の総まとめとして発表会を実施。内外にアピールする

は4人、3学年は2人の教員が担当する。まず1時間は前回の実習の振り返り。各々感想を書かせ、実習先で学んだことや困ったことなどを発表させ体験を共有する。残り1時間はマナーやコミュニケーション、グループ討論など実践的授業が多い。たとえば、地図に描かれた道順を言葉で説明するなど表現力をのばす工夫も。参加型の授業で教科学習が苦手な生徒にもやる気になってもらい、社会が必要とされる力をつけていく。それをまた、次の実習で応用する。そのサイクルを大切にしているのだ。

そして、もうひとつの科目、3学年の「文書デザイン」は高大連携によるデュアルシステムといえる。授業の内容はコンピュータやデータ通信を使った情報の表現力や発信力について。生徒を大学に出向かせることが重要と考えている。芸術を含むさまざまな分野の大学教員が参加してくれており、情報スキルだけでなく、幅広い視点からのものごとのらえ方やコミュニケーション力を学んで欲しいという。

「すべての生徒がうまくいくわけではなく、無断欠席があったり、実習の途中で挫折したりということでもあります。学校にいるよりマシという気持ちで選択する生徒もいれば、実習でせっかく将来の目標ができて、家庭の事情であきらめざるをえない生徒もいます。それでも地域と連携し一人ひとりの生徒と向き合いながら取り組むデュアルシステムは、新しい時代の人権教育でありキャリア教育であると自負しており、取り組む意義は大きいと思います」

同校では、今後もデュアルシステムの発展に力を入れていくとともに、全国の普通科高校でのデュアルシステムの普及に貢献していきたい考えだ。